～酪農は私の天職～

搾乳ロボットの導入で家族が一致団結

森和子さん（半田市）
乳肉複合

【平成21年10月20日掲載】

知多半島の真ん中に位置する半田市において、乳肉複合経営を行っている森牧場の森和子さんを紹介します。

１　交流の場がステップに

今回お話を伺ったのは和子さんとお嫁さんの芳美さんです（写真１）。
今まで、外にはあまり出なかった和子さんが、県農村生活アドバイザーの支部長を担うようになってから、人との交流の幅が広がりました。県農林水産部幹部との農政懇談会において、司会進行役という大役を任されたときは、「初めての経験で大変緊張しましたが、日頃から感じていることを発表することができて、よい経験になりました。」と感想を語られました。
「普段の仕事は、搾乳と餌やり、そして、経理も私の担当です。また、牛舎のまわりの環境美化にも力を入れ、花壇づくりや緑の植栽を行っています。」と語られました。環境美化に加え、地元の小学生が動物とのふれあいができるようヤギを飼って、子ども達の農場訪問を積極的に受け入れています。
平成２０年から農村生活アドバイザー知多支部長、また県農村生活アドバイザーの副会長も歴任し、地元半田市では、「担い手育成総合支援協議会」および「耕作放棄地対策協議会」の委員にも選出され、酪農の仕事、各要職、プライベートに忙しい日々を送られています。協議会の委員として担い手育成や耕作放棄地の問題に関わるようになってから、真剣に半田市の農業について考えられるようになりました。

写真１　和子さんと芳美さん

２　酪農は私の天職

「酪農は私の天職」だと語る和子さんが酪農経営に携わり始めたのは、牛を飼い始めたご主人の時宗さんと結婚された時でした。まだ２０歳の時です。当時、牛の頭数は１２頭。それから４０年余り過ぎ、現在、乳牛２００頭、肥育牛３００頭の計５００頭となっています（写真２）。

労力は時宗さん、和子さん、息子の千早さん、芳美さんの家族４人で、ヘルパーが月３回入り、休みなく仕事をしています。家族の役割分担として、肥育牛は時宗さんと和子さん、乳牛は息子さん夫婦が担当しています。事務管理（個体識別、共済手続等）は芳美さんが分担しています。芳美さんも立派な森家の担い手です。

写真２　牛舎内の様子

３　搾乳ロボットの導入で家族が一致団結

搾乳ロボットを導入したのは、千早さんが結婚した翌年の平成１２年でした（写真３）。　搾乳の作業は牧場作業の中で一番大変なのですが、ロボットを導入するためにはかなりの投資と管理技術が必要となります。家族で話し合い、時宗さんと千早さんの意見が一致して導入が決まりました。導入した当初は、家族のだれかがロボットの管理につきっきりでした。結婚しばかりの芳美さんも、簡単な掃き掃除から始め、のちに農作業にも慣れました。家族４人が一致団結したのがこの時です。

森牧場ではロボット３台を集中的に導入し、雇用に頼らない経営を実践しています。　ロボット搾乳をはじめて見学しましたが、牛が自由にロボットの中に入り、機械が自動で牛の乳頭を探して、搾乳し始めるという作業で、見るものすべて驚きの連続でした。

写真３　ロボット搾乳機

４　kazukoさんのひとり言

和子さんは７～８年前に、酪農家メンバー（農政研）のホームページ作成に携わったのをきっかけに、自身のホームページ「もりふぁみりい」を立ち上げられました。
内容は森牧場の「プロフィール」や「ロボット搾乳に関する夢」など、特筆は和子さんのブログ「kazukoさんのひとり言」で、日常の出来事をユーモラスにつづってあります。これを読むと森ファミリーの和気あいあいとした光景が浮ぶこと間違いありません。

５　将来の夢

将来の夢をうかがったところ、和子さん、芳美さん２人とも声をそろえて「みんなの時間のゆとりがほしい」と語られました。３台目のロボット搾乳を導入した時は、楽になったが、その後、乳牛の頭数が増え、いっぱいいっぱいで余裕がないそうです。このため、家族全員がゆっくり休むことができるよう、家族全員で意見を出し合い、乗り切っていきたいと語られました（写真４）。

写真４　将来の夢を語る和子さん

執　　筆：農業経営課
取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課

Copyright © 2009, Aichi Prefecture. All right reserved.